至花道

一、二曲三体事

一、無主風事

　　一、闌位事

　　一、皮肉骨事

　　一、体用事

一、当芸の稽古の条条。其風体多しといへども、習道の入門は、二曲・三体を過ぐべからず。二曲と申は舞歌なり。三体と申は物まねの人体也。

　先、音曲と舞とを、師に付て、よくよく習ひ極めて、十歳ばかりより童形の間は、しばらく三体をば習ふべからず。ただ、児姿を以て、諸体の曲風をなすべし。これは、面をも着ず、何の物まねも、ただその名のみにて、姿は童形によろしき仕立なるべし。楽人の舞にも、陵王・納蘇利など、みなその舞名までにて、童舞は直面の児姿なるがごとし。是則、後後までの芸態に幽玄を残すべき風根なり。大学云、其本乱而不末治。

さて、元服して、男体になりたらんよりは、既面をかけ、姿を品品になし変へて、その似せ事多かるべげれども、なをも、まことの上果の芸風に至るべき入門は、三体のみ也。老体・女体・軍体、是三也。助になるべき人体の学び、女になるべき人体の学び、勢へる人体の学び、此三をよくよく習ひ極めて、さて、童形より習ひ覚えつる舞歌の二曲を、品品にわたして事をなすならでは、別の曲道の習ひ事あるべからず。

　此外の風曲の品品は、みな、この二曲三体よりをのづから出来る用風を、自然自然に待べし。神さび閑全なるよそをひは、老体の用風より出で、幽玄みやびたるよしかかりは、女体の用風より出で、身動足踏の生曲は、軍体の用風より出でて、意中の景、をのれと見風にあらはるべし。もし、なをも芸力おろそかにて、此用風生ぜずとも、二曲三体だに極まりたらば、上果の士手にてあるべし。此二曲三体を、定位本風地体と名付。

　ここに、当世の申楽の稽古を見るに、みなみな、二曲三体の本道よりは入門せずして、あらゆる物まね、異相の風をのみ習へば、無主の風体に成て、能弱く、見劣りして、名を得る芸人、さらに無し。返返、二曲三体の道よりは入門せずして、はしばしの物まねをのみたしなむ事、無体枝葉の稽古なるべし。最初の児姿の幽風者三体に残り、三体の用風者万曲の生景と成を知べし。

一、此芸に、無主風とて、嫌ふべき事あり。よくよく心得べし。是は、まづ、生得の下地に得たらん所あらむは、主なるべし。さりながら、習道の劫入て、下地も又、をのづから出来べきやらん。

まづ、舞歌に於いても、習似するまでは、いまだ無主風なり。これは、一旦似るやうなれども、我物にいまだならで、風力不足にて、能の上らぬは、是、無主風の士手なるべし。師によく似せ習い、見取りて、我物になりて、身心に覚え入て、安き位の達人に至るは、是、主也。是、生きたる能なるべし。下地の芸力によりて、習い稽古しつる分力をはやく得て、其物になる所、則有主風の士手なるべし。返返、有主・無主の変り目を見得すべし。「非為堅能為堅也」云り。

　一、此芸風に、上手の極め至りて、闌たる心位にて、時時異風を見する事のあるを、初心の人、これを学ぶ事あり。この闌けてなす所の達風、左右なく学ぶべき事にはあらず。なにと心得て似せ学ぶやらん。

抑、闌たる位の態とは、此風道を、若年より老に至るまでの年来稽古を、ことごとく尽くして、是を集め、非を除けて、已上して、時時上手の見する手立の心力也。これは、年来の稽古の程は嫌い除けつる非風の手を、是風に少し交ふる事あり。上手なればとてなにのため非風をなすぞなれば、これは上手の故実なり。よき風のみならでは上手には無し。さる程に、よき所めづらしからで、見所の見風も少し目慣るるやうなる処に、非風を稀に交ふれば、上手のためは、これ又めづらしき手也。さるほどに、非風却て是風になる遠見あり。これは、上手の風力を以て、非を是に化かす見体也。されば、面白き風体をもなせり。

　これを、初心の人、ただ面白き手と心得て、似すべき事に思ひて、これを学べば、もとより不足なる手なるを、愚かなる下地に交ふれば、焔に薪を添ふるがごとし。もし、闌くると云事を、態よと心得て、上手の心位とは知らざるか。よくよく安得すべし。上手は非と心得ながらするを、初心はこれを是と見妄して似するほどに、たがひの宛て所、黒白の違いなり。さるほどに、劫をも積まず、まして初心にては、なにとて闌と云位には至るべき。しかるに、上手の闌けてなす所を初心の似するは、非を似するになりて、下手にはゑてになるか。

　「若所為、求若所欲、猶縁木而求魚也」。又云、「木に縁りて魚を求むるは、愚かなるまで也。失は無し。若所為、欲ところに若はんことを求むるは、失あるべし」と云り　孟子見たり。

　上手の闌たる手の、非却て是になる手は、これ、上手にはしたがふ曲なり。下手にはしたがはぬ手なり。さる程に、下手の我意にしたがふ分力にて、したがはぬ上力を求むるは、かならず失あるべし。為る所に若て欲する所に若はん事を求むるがごとし。もし、本風の内の上曲ならば、似するとも、叶はぬまでにて、さのみの失はあるべからず。これは、木に縁りて魚を求むる分際也。返返、上手の闌けてなす所の、非風、異相の曲を学ぶべからず。これ、失を望む稽古なるべし。心得べし。

　ただ初心の人は、常に師に近づきて、不審を立てて、我芸の位の程を、よくよく問ひ明らむべし。かやうの奥風を見るに付ても、初めの二曲三体の習風を、立かへり立かへり見得すべし。法華云、「未得為得、未証為証」。心得べし。

一、この芸態に、皮・肉・骨あり。此三、そろふ事なし。しかれば、手跡にも、大師の御手ならでは、この三そろひたるはなしと申伝たり。

　抑、此芸態に、皮・肉・骨の在所をささば、まづ、下地の生得のありて、をのづから上手に出生したる瑞力の見所を、骨とや申べき。舞歌の習力の満風、見にあらはるる所、肉とや申べき。この品品を長じて、安く美しく極まる風姿を、皮とや申べき。又、見・聞・心の三にとらば、見は皮、聞は肉、心は骨なるべきやらん。又、音曲ばかりの内にも、この三はあるべし。声皮、曲肉、息骨。舞のみにも又あるべし。姿皮、手肉、心骨。よくよく心得分べし。

　ここに、当世の芸人の事を見るに、此三を持したる人なきのみにあらず、かやうの事のあるとだに知れる物なし。是は、亡父のひそかに申伝しによて、身にもわきまへたり。今ほどの芸人を見及分は、ただ皮を少しするのみ也。それも、まことの皮にはあらず。又、似する分も皮のみ也。しかれば、無主の士手なり。

もし、此三を持したる士手なりとも、又知るべき事あり。下地の得たらん所は骨、舞歌の達風は肉、人ないの幽玄は皮にてありとも、三を持ちたるばかりなるべし。三そろふ為手とは、なをも申がたし。そろふと申さん位は、たとへば、如此の瑞風をことごとく極めて、すでに至上にて、安く、無風の位になりて、即座の風体は、ただ面白きのみにて、見所も妙見に亡じて、さて後心に安見する時、なにと見るも弱き所のなきは、骨風の芸劫の感、なにと見るも事の尽きぬは、肉風の芸劫の感、なにと見るも幽玄なるは、皮風の芸劫の感にて、離見の見にあらはるる所を思ひ合はせて、皮・肉・骨そろひたる為手なりけるとや申べき。

一、能に体・用の事を知るべし。体は花、用は匂のごとし。又は月と影とのごとし。体をよくよく心得たらば、用もおのづからあるべし。

抑、能を見る事、知る物は心にて見、知らざるは目にて見る也。心にて見る所は体也。目にて見る所は用也。さる程に、初心の人は、用を見て似するなり。是、用の理を知らで似する也。用は似すべからざる理あり。能を知る物は、心にて見るゆへに、体を似する也。体をよく似する内に、用はあり。知らざる人は、用を為風と心得て似する程に、似すれば用が体になる事を知らず。是、まことの体にあらざれば、終には、体もなく、用もなく成て、曲風断絶せり。かやうなるを、道もなく、筋もなき能といへり。

　体・用といふ時は、二あり。体なき時は、用もあるべからず。さる程に、用はなき物にて、似すべき宛てがひもなきを、ある物にして似する所は、体にならずや。これを知ると者、用は体にあり、別にはなきものと心得て、似すべき理のなきを知る事、則能を知る物也。しかれば、用をば、似すべき理のなければ、似ずべからず。体を似するこそ則用を似するにてありけれと心得べし。返返、用を似すれば体になる理を安得せば、体・用の分目をよく心得たる為手なるべし。ある人云、「似せたきは上手、似すまじきは上手也」といへり。しからば、似するは用、似たるは体なるべきやらん。

一、かやうの稽古の条条、浅深、昔はさのみにはなかりし也。古風の中に、をのづから此芸力を得たりし達人、少少見えしなり。其比は、貴人・上方様の御批判にも、是をのみ御覧じはやされて、非をば御讃談もなかりし也。当世は、御目も弥闌て、少しきの非をも御讃談に及ぶあひだ、玉を磨き、花を摘める幽曲ならずば、上方様の御意にかなふ事あるべからず。さる程に、芸の達人は少なし。当道いよいよ末風になるゆへに、かやうの習道おろそかならば、道も絶えぬべきかと、芸心の及所を、大かた申のみなり。猶猶、このほかは、問人の気量の分力によりて、相対ての秘伝なるべし。

応永廿七年六月日　　世阿書

論語云、「可与言而不与言、失人。不可与言而与言之、失言」、易云、「非其人伝其書、所天悪」。

遊楽の成功長じて、用又体に成見風可有。上果曲体の見風に至ぬれば、体・用、不可有分目。然ば、諸体之用風即体曲と成成功之曲位、是妙体歟。又、一切、懸と名付る見風、是又無所也。只自体見風匂也。然ば、懸は、体に有て用に見えたり。

白鳥花を啣む、是幽玄風姿歟。